

大分県下における近年の歴史時代遺跡の調査

—大分県歴史考古学の現状と課題—

洪 谷 忠 章

「歴史時代の考古学」的研究は、明治中頃からはじまった法隆寺再建非再建論争、大正時代にかけての神籠石性格論争、大正から昭和の中頃にかけて実施された都宮跡・城柵跡・寺院跡の調査により大きく前進した。特に法隆寺の再建・非再建論争は、我が国の考古学界だけでなく、歴史学界においても最も注目されるものであった。

元来、歴史時代の考古学は、仏教関係の遺跡や遺物に主体が置かれたきらいがあったが、これは仏教考古学の研究に著しいものがあり、他の分野の関心が薄かったからともいえる。

歴史時代の考古学とは、歴史時代の文化を研究対象とする考古学であるが、発掘調査の方法が特に先史時代の考古学と異なることはない。しかし歴史時代の考古学は、文献史的な研究が占める割合が極めて大きくなり、また民俗学的な研究が重要な場合もある。

かつての考古学は、文献史学の補助学としてとらえられることが多かったが、これは考古学的研究が単なる資料の紹介であれば、こうしたとらえ方も当然であろう。

ところが最近の考古学は、資料の集積や化学的な分析等によって実証的な見解を提示し、考古学的な独自の歴史の構成や展

開を究明しようとしており、特に歴史時代の考古学的研究にはそうした姿勢が見られるのである。

また調査の体制も、飛鳥の諸宮から平安京に至る京に関する研究、東北地方の多賀城をはじめとする多くの城柵跡や、九州の大宰府や水城跡の調査も、国及び県レベルの組織化された調査体制が確立し、大きな成果があげられている。

さらにこうした傾向は、国府・郡衙など地方官衙の研究にも及び、考古学と歴史学の両面からの究明がされ、各地でその実態や性格等についてまでの論及が報告されている。

その他、条里遺跡、集落跡、城郭跡、墓地、生産遺跡など各分野に置ける研究も盛んとなり、時代も古代・中世からかつて考古学者がほとんど注目しなかった近世へと広まっている。

二

大分県の「歴史時代の考古学」的研究は、やはり仏教関係の調査・研究からはじまる。それは大分県が、宇佐・国東を中心として仏教遺跡が豊富であるという地域的な特徴も一因している。特に大正から昭和十年代にかけては、河野清実・久多羅木儀一郎・日名子太郎らの郷土史家により、石塔の調査・研究が盛んに行われた。河野は大正二、三年にかけて、国東半島を中心として分布する額部の突出した豊後型板碑を歴史地理に紹介し、日名子は昭和三年より「大分県金石年表」其一〜其八までを随時「大分県史蹟名勝天然紀念物調査報告」に発表している。日名子の成果は、彼の死後、昭和十五年「大分県金石年表」として発刊され、大分県の金石文研究には欠くことの出来ない基礎資料として高く評価されている。

また国東地方を中心に分布する宝塔で、京都帝国大学天野俊一博士によって命名された国東塔も、古くから調査・研究が行われ、現在も入江英親らによって進められている。

しかしこうした石造品の調査は、考古学的な視野から観察されたものは少なく、大半が美術的な立場からの研究であったと言える。

さらさらこうした傾向は、各市町村の行政担当者や郷土史家にもみられる。例えば石塔群の所在地が開発等の対象地になっても、石塔だけを移せば良いという考えである。国東塔や板碑、五輪塔などは供養塔や墓碑として用いられる。墓碑であれば当然その石塔の下部には施設があり、遺品が存在するのである。従ってこれらは埋蔵文化財として取り扱われるが、考古学や歴史学などの調査・研究によって、石塔のもつ歴史的な意味や社会的な背景等が解明するのである。

こうした中で、浜田耕作の『豊後磨崖石仏の研究』³は、大分県だけでなく我が国における仏教考古学の新分野の開拓として注目されるものであり、賀川光夫の「磨崖石塔について」⁴も、歴史考古学的な所謂形式的な見地から極めて興味を有するものと言えよう。また賀川の「考古学上より見た上代の宇佐地方」⁵は、宇佐地域の仏教遺跡を紹介し、古瓦の分類、宇佐地域の仏教遺跡の意義等について触れており、宇佐弥勒寺などから出土する古瓦を、記録考証等によって時代の位置づけを行った河野清実の「大分県内の古瓦」⁶と共に、大分県における歴史考古学の先駆的な研究論文といえる。

発掘調査では、昭和二九年に石田茂作博士の指導により宇佐虚空蔵寺塔跡の調査が行われた。この調査は、大分県における本格的な寺院跡調査の契機となり、出土した埴仏は大和・南法華寺のものと同製品であることから、畿内との密接な交渉を物語るものとして注目された。⁷

また同年からは宇佐弥勒寺の調査も進められ、北から南に講堂・金堂・東西両塔・中門・南門の伽藍が確認され、奈良時代の古瓦には法隆寺系と大宰府系の二種が出土した。⁸

このように大分県における「歴史時代の考古学」的研究も、仏教関係の遺跡や遺物に主体が置かれたものであった。しかし最近の大規模な開発に伴う発掘調査により、歴史時代の遺跡や遺物が各地で発見され、その資料も日毎に増加の傾向を示し、注目される遺跡も少なくない。従って大分県における最近の歴史時代遺跡の発掘調査の状況について触れてみよう。

官衙関係

昭和五七、五九年にかけて、大分市教育委員会は大字小池原の地蔵原遺跡の調査を行ったが、奈良末の古瓦、溝に囲まれた掘立柱建物群や倉庫群が検出され、考古学と歴史学の両面から注目された。

大分県では、このような古瓦を伴う大規模な掘立柱建物群の検出ははじめてであり、その性格について大きな論争が行われた。国府、郡衙あるいは上級役人の館跡などの説があったが、考古学及び文献史学の上からそれを究明するまでに至っていない。しかし遺跡の規模から何らかの官衙遺跡であることは間違いないであろう。

元来、豊後国府の所在地については、大分市南大分古国府地区が推定されている。これは古国府の地名や国政・石明・銅給・五丁などの小字名が残っていること、さらに印鑰社が存在していることなどが大きな要因となっている。そしてその位置については学者により各説みられるが、大方において古国府地区で一致している。

一方、古国府地区は近年住宅地として団地・大型マンション等が建設され、かつての農村的な景観は姿を消している。こうした開発に対し大分市教育委員会は、豊府小学校建設用地の発掘調査以来、随時緊急調査を実施し、その調査地は国政・銅給・雲田・町口・石明・石橋・五丁・高近・八幡前などに及んでいる。しかし調査の結果は、国府を推定する遺物・遺構は何ら発見されず、中世大友氏との関連遺跡の検出に終始している。

このことから、古国府地区は中世以降の開発によって、国府の痕跡が壊滅したとの見解もあるが、これだけの調査区に全くその痕跡を残さない状況では、さらにその周辺へ研究対象の範囲を求めることも必要である。

その他、官衙遺跡には郡衙跡・軍団跡・駅跡・牧跡などがあるが、大分県ではこれらについてもその位置すら明らかでなく、今後に残された課題は大きい。

仏教・信仰関係

昭和二九年、宇佐虚空蔵寺塔跡の調査以来、宇佐市では圃場整備事業に伴って寺院跡の調査が次ぎ／＼に行われた。このうち虚空蔵寺や法鏡寺跡は、東に金堂・西に塔を配置する法隆寺式の伽藍が確認された。また、弥勒寺は薬師寺式の伽藍が明らかであったが、宝物殿建設に伴う発掘調査では、創建期の寺域について再考を要する成果を得ている。¹⁰

中世の寺院では大楽寺の調査がされた。大楽寺は「大楽寺文書」に応永二五年（一四二五）に護摩堂を造立したことが記されている。調査では、「応永」「吉日」・「敬白」とへら書きされた平瓦が出土し、これらの瓦は護摩堂に葺かれたものと考えられ、文献を考古学的な成果によって実証した例といえる。¹¹

大分市では豊後国分寺の調査が行われている。国分寺は八世紀の中頃、国家的事業として各国に設置されたもので、豊後国分寺が大分市南西部、大分川左岸の段丘上にある国分寺の一角であることは、江戸時代の『大宰管内志』などによって知られていた。¹²

昭和四九年以来五ヶ年に及ぶ調査によって、伽藍全体は東門と西門の間で一八二m、南北は二九二mの規模を持つことが推定されており、中門と金堂をかこむ回廊の内側の西には、一辺一八mの基壇を持つ塔跡が存在し、その規模は全国国分寺でも三指に入るといわれている。現在、国分寺跡は公有化され、環境整備事業が進められようとしているが、僧房などその他の遺構や、国分寺に対応する国分尼寺についても未だその所在地は不明で、今後も大きな課題が残されている。

臼杵市深田の臼杵石仏周辺では、都市公園計画に伴う事前調査として、古園石仏前、満月寺周辺、石仏群と満月寺の間にある水田地帯で調査が行われた。¹³この調査は、石仏群の造顕年代との関連にも大きな興味を持たれたが、十三世紀〜十四世紀代の遺物が多く、藤原期とされる石仏群の造顕年代を解明するには至らなかった。

次に、寺院と同様に地方における仏教思想の流入を知る資料に火葬墳墓がある。従来、火葬墓については、偶然の機会に出土した蔵骨器の研究にその主体が置かれていた。大分県の火葬墓については、かつて触れたことがあるが、その後、¹⁴大分市地蔵原

遺跡、中津市勘助野地遺跡¹⁵、同市ガラヌノ遺跡¹⁶は発掘調査によって蔵骨器が出土しており、近世の墓地も確認されている。大分県において、火葬墓が一般庶民へ波及するのは、室町時代以後であるが、それは仏教思想の流入により各地で異なりを見せるようである。

信仰関係では、特に石信仰の遺跡が多い。宇佐宮御許山上の石体権現、西国東郡真玉町猪群山の巨石群¹⁷、同町時安環状列石、東国東郡国見町元宮巨石立石¹⁸、同町鬼籠列石などは代表的な遺跡である。しかしこれらの遺跡で本格的な発掘調査が行われたものは少なく、その性格や年代については不明なところが多く、また、直入郡や大野郡に所在する石信仰には、日本書紀や豊後風土記に見える石占が、民間の間に口碑と混同されて信仰の対象となったものが多い。こうしたことから石信仰遺跡については、考古学のみでなく、民俗学的な見地からの調査も必要である。

集落関係

歴史時代の集落跡も、近年の広面積の発掘によって資料の増加をみるが、しかしそのほとんどは農村で、漁・工・鉦・窯業などの集落についてはほとんど明らかでない。

宇佐市藤田遺跡²⁰は、宇佐神宮に接しており、神宮との関連遺跡が考えられていたが、応永の古図に描かれた家並、神宮関係資料により大宮司の公邸を意味するものが明らかとなっている。

三重町惣田遺跡²¹は、三重郷の中世農村集落の一端を示すものとして注目されよう。元来、中世の村落は、近世の村落の延長線上にあると解されてきたが、遺跡は大野川の支流に面した舌状の台地上に位置している。近世の集落は傾斜面へ移行しており、ここに中世から近世への集落の変遷をみる事が出来る。

また、県立宇佐歴史民俗資料館では、歴史・考古・民俗・美術等各分野の専門的な立場から、豊後高田市田染荘の総合的調査を実施している。²²調査の方法は、対象地域の千分の一地形図を作成し、地名の悉皆調査を行ない、その地域内の灌漑体系や

村落組織、金石文や考古遺物、さらに信仰形態などの実地調査を行ない、中世村落の復原に大きな成果を示しており、今後の歴史時代遺跡の調査の方法を示すものとして高く評価される。

その他、調査例として別府市羽室台遺跡・玖珠町寺田遺跡²³などがある。特に寺田遺跡は、近世農村の調査例として注目される。

生産関係

生産関係の調査は、特に窯業において盛んであるが、大分県では豊前（中津・宇佐地域）において若干の調査がある程度で最も遅れた研究分野といえる。

中津市伊藤田古窯跡群は、中津市東南部の野依より伊藤田にかけて分布する窯跡群の総称で、城山・大谷・草場・夜鳴池・ホヤ池・踊ヶ迫・山田池・瓦ヶ迫の9窯跡群からなる。昭和三三年、賀川光夫等によって調査された踊ヶ迫窯跡は、七世紀前半の瓦陶兼業窯で、同心円印文の須恵質平瓦と須恵器が共伴して注目された。

これら窯跡群のうち、最近の開発事業に伴って瓶ヶ迫²⁵・夜鳴池²⁶・城山窯跡群の調査が追加された。これらにより伊藤田窯跡群は六世紀後半から九世紀代に及ぶ須恵器生産が、継続的に操業が行われたことを示し、七世紀代には瓦類の生産が行われたことが明らかとなったが、今後はそれを構成する工人、さらには操業の展開過程など多くの問題を提供している。

近世の窯跡としては、臼杵市末広窯の調査が知られる。文献によれば、稲葉藩十一代弘通が隠居後の享和二年（一八〇二）にお庭窯を開いたことに始まるが、文化元年（一八〇四）以後は日常雑器が焼かれ、文化一二年には廃窯となっている。窯業が十三年間の短期間で、近世の窯の構造、出土遺物の年代を明らかにする好資料と言える。

窯は、全長一七・五mを測り、焚口と焼成室五室からなり、白磁碗・絵付碗・皿・こね鉢・浅鉢・スリ鉢・甕・鶴首瓶など出土している。

その他、条里遺跡も生産関係に含めることが出来よう。条里遺跡は、近年各地で調査が行われるようになり、大分県でも豊後高田市上野条里遺跡²⁸、緒方町緒方条里遺跡²⁹などで発掘調査が行われている。しかし条里遺構の年代や全体的な構成などはなかなか明らかにされず、考古学や文献史学、あるいは歴史地理学だけでなく、水がかりの調査など現地での聞きこみ調査も多く取り入れる必要がある。

城郭・館関係

大分県内では、砦・館を含めた城跡は約八〇〇ヶ所が知られている。しかしその大半は築造時期、城の構造や性格、正確な位置については不明なものが多く、伝承のみによるところも少なくない。特に中世以降のその地域の盛衰を語るに欠かせないのが城跡であるが、竹田市岡城は国、大分市府内城・臼杵市臼杵城・宇佐市光岡城が県の史跡指定になっている程度で、やや関心の度合が低かったのは否めない。

これまで調査の行われた臼杵市栗山城³⁰・臼杵城、大分市尼ヶ城・守岡城・雄城城等も、調査が一部の限られた地区であったり、緊急調査ということもあって、城の全体的な構造や性格は明らかにされていない。

こうした中で、昭和五四年度より4ヶ年にわたって調査の行われた玖珠町伐株山城跡の調査は、大分県における初の本格的な発掘調査といえる。伐株山城跡は玖珠城とも呼ばれ、建武三年三月三日の「足利尊氏軍勢催促状」など多くの文書によってその動勢を知ることが出来る。しかし城名や築城年代、廃棄時期を明らかにするものではなく、考古学的調査によってある程度それが解明されたものと思われる。

調査の結果は、出土遺物等から山頂に現存する土塁等の遺構、即ち伐株山頂が山城として本格的に整備されたのは十六世紀後半代に考えられ、歴史的にみると、大内氏が豊後に侵入の動きを見せはじめた天文年間に大規模な整備事業が行われたものと解される。

昭和五八年、五九年にかけては、宇佐市で高森城、安岐町で安岐城跡の発掘が行われた。現在、整理中であるが、両城跡とも大規模な土塁や空堀で囲まれ、中世末期の城の構造が明らかにされつつある。歴史学者に、さほど注意されなかった城跡が考古学的調査によって一躍注目され、その実態が明らかにされようとしている。

また九重町岐部城跡の調査は、発掘調査こそ行っていないが、詳細な現地踏査を実施し、文献史学、周辺の文化財調査によって岐部城跡の歴史的な背景・性格等を探求しており、市町村におけるこうした地道な調査こそ高く評価されるべきである。

四

以上、最近における大分県の歴史時代遺跡の調査とその成果について触れてきたが、その他にも注目すべき遺跡は多い。日出町伊勢森遺跡³³は、中世の甕棺二基が発見され、副葬品として真珠と瑠璃製の小玉が出土した。この時期の甕棺墓の代表的な遺跡とされ、また甕は大神地区大峰の鶴の土器窯で製作されたものと合致している。

竹田市原山B遺跡³⁴は、粘土製のカマドを設けた奈良時代の竪穴住居跡が検出されている。東国の一部では、中世においても竪穴住居跡が用いられており、大分県の歴史時代の集落及び住居の形態を知る上でも注目される。

大野町代ノ原遺跡³⁵では、溝や大規模な柱穴群と、中世の青・白磁等が検出されており、有力な武士層の館跡と想定されている。また、玖珠町下横尾遺跡³⁶・野津町水地遺跡³⁷・大分市宮苑遺跡³⁸などでも、中世の輸入陶磁器や土師質土器などが出土しており、各地で歴史時代の遺跡が調査され、大きな成果を得ている。

しかし、歴史時代の遺跡は、官衙・寺院・条里・村落・城郭にしても調査の対象面積が広く、また微密な調査方法が要求され、短期間の日程ではとても消化出来るものではない。こうしたことから、福井県一乗谷の朝倉氏館遺跡、広島県草戸千軒遺跡などでは調査研究所が設置され、長期の年次計画による大規模な発掘調査が実施され、往古の姿が浮彫りにされている。

大分県では今だその動きはないが、大分市古国府一帯は大友氏と関連の深い遺構が次ぎ／＼に発見されており、緊急調査に

よる単なる記録保存でなく、各専門分野からなる総合的な調査・研究が必要ではなからうか。大分県の中世史は、大友氏を除いて語れるものではないが、それは福井県における朝倉氏と同様である。大友氏については文献史学の上でかなり研究が進み、歴史的にはほぼ解明されている。しかしそれを考古学的に実証した例はなく、歴史学の上からもこうした調査・研究組織が望まれるのではなからうか。

しかし現状でこうした調査体制の組織化は、非常に困難な状況にあるが、少なくとも歴史時代の遺跡の調査にあたっては、対象遺跡の性格・時代によって、多くの自然科学あるいは文献史学、民俗学など関連科学の援用を充分に受けるべきで、それを認識したうえで、考古学の歴史研究における独自性を主張することも必要とならう。

参考文献

- 注1 河野清実「豊後に於ける板碑様の古碑」『歴史地理』二二—五 大正二年、同「豊後に於ける板碑系の碑」『歴史地理』二二—三、大正三年
- 2 日名太郎「大分県金石年表」(昭和十五年)
 - 3 浜田耕作「豊後磨崖石仏の研究」『京都帝国大学文学部考古学研究报告』九 大正十五年
 - 4 賀川光夫「磨崖石塔について」『大分県文化財調査報告書』第一集 昭和二十九年
 - 5 賀川光夫「考古学上より見た宇佐地方」『大分県文化財調査報告書』第五集 昭和三十三年
 - 6 河野清実「大分県内の古瓦」『大分県史蹟名勝天然記念物調査報告書』第一三輯 昭和十一年
 - 7 賀川光夫「虚空蔵寺址発見埴佛」『大分県地方史』1 昭和二十九年
 - 8 賀川光夫他「弥勒寺遺跡」『大分県文化財調査報告』第七輯 昭和三十六年
 - 9 小田富士雄他「法鏡寺跡・虚空蔵寺跡」『大分県文化財調査報告』第二六輯 昭和四十八年
 - 10 昭和八年度より宇佐歴史民俗資料館により調査が実施されている。

- 11 昭和五八年、宇佐市教育委員会により、收藏庫建設用地の調査が行われた。
- 12 大分市教育委員会『豊後国分寺跡』昭和五四年
- 13 白杵市教育委員会編『白杵石仏群地域遺跡発掘調査報告書』昭和五七年
- 14 波谷忠章『県内発見の火葬墓について』『大分県地方史』第七十九号 昭和五〇年
- 15 大分県教育委員会編『上野原遺跡群Ⅲ・伊藤田窯跡群』昭和五九年
- 16 中津市教育委員会『ガラヌノ遺跡』『中津市文化財調査報告』第3集 昭和五九年
- 17 齊藤忠『猪群山』昭和五八年
- 18 竹田津町教育委員会『大分県竹田津町祭祀遺跡』昭和三五年
- 19 18に同じ
- 20 宇佐市教育委員会『藤田遺跡Ⅱ・高森城跡』昭和五八年
- 21 三重町教育委員会『惣田遺跡』昭和五七年
- 22 大分県立宇佐歴史民俗資料館『豊後国田染荘』昭和五七年・昭和五八年
- 23 大分県教育委員会『羽室遺跡発掘調査概報』昭和五七年
- 24 昭和五九年、玖珠町教育委員会で調査を実施し、現在整理中である。
- 25 大分県教育委員会『上ノ原遺跡群Ⅱ・伊藤田古窯跡群Ⅰ』昭和五七年、同『上ノ原遺跡群Ⅲ・伊藤田古窯跡群Ⅱ』昭和五八年
- 26 25に同じ
- 27 白杵市教育委員会『末広焼』昭和五八年（現地説明用パンフレット）
- 28 豊後高田市教育委員会『上野条里遺跡』昭和五八年
- 29 昭和六〇年一月より大分県教育委員会が発掘調査
- 30 白杵市教育委員会『栗山城』昭和五二年

『大分県史料』

- 大分県史料 N926 (諸家文書補遺)
 大分県史料 N927 (キリシタン史料)
 大分県史料 N929 (益永文書)
 大分県史料 N930 (宇佐神宮関係史料)
 大分県史料 N931 (大友文書録)
 大分県史料 N932 (大友文書録)
 大分県史料 N933 (大分文書録)
 大分県史料 N934 (大友文書録)
 大分県史料 N935 (諸家文書補遺)
 大分県史料 N936 (豊後国凶田帳)
 大分県史料 N937 (佐伯藩史料、松平一伯史料)

第38巻以降はしばらく休刊します。

N926～35は各5,000円、N936～37は6,000円
 です。

大分県中世文書研究会

- 38 昭和五九年大分市教育委員会が調査し、溝に囲まれた掘立柱建物群が確認されている。
 37 大分県教育委員会「水地遺跡」【大分県内遺跡詳細分布調査概報】1 昭和五六年
 36 大分県教育委員会「下横尾遺跡」【大分県内遺跡詳細分布調査概報】2 昭和五七年
 35 大分県教育委員会「代ノ原遺跡」【大分県内遺跡詳細分布調査概報】1 昭和五六年
 34 竹田市教育委員会「原山B遺跡」【菅生台地と周辺の遺跡】V 昭和五四年
 33 大分県教育委員会「伊勢森遺跡」【大分県内遺跡詳細分布調査概報】1 昭和五六年
 32 九重町教育委員会「岐部城跡調査報告書」文化財調査報告第七輯 昭和五六年
 31 玖珠町教育委員会「伐株山城跡」昭和五八年

(大分県教育庁文化課主任)